

Shanghai Quartet Special Interview

上海クアルテットのイーウェン・ジャン(ヴァイオリン)とホンガン・リ(ヴィオラ)に来日公演についてお話しいただきました。

【Q1】上海クアルテットのみなさんにとって、ベートーヴェンはどのような存在ですか？

イーウェン・ジャン(以後、Y): ベートーヴェンは私たちの偶像的存在であり、モットーであり、また、人間として到達する最高のところにいる人です。

【Q2】今回なぜベートーヴェンの全 15 曲の中から、第 3 番、11 番、15 番を選んだのですか？

ホンガン・リ(以後、H): 記念年や、特別なイベントの際にはあえて、ベートーヴェンを選び、演奏をするほど、ベートーヴェンは上海クアルテットにとって、とても特別な作曲家です。今回は前期、中期、後期からそれぞれの曲を選びました。3 曲がそれぞれ、その期の作曲法やキャラクターの違いをはっきりと反映させているからです。観客の皆様は、初期から後期の彼の人生と、その作曲技法のはっきりとした違いを体感することができます。

Y: 第 3 番は、実は、ベートーヴェンが完成させた一番最初の弦楽四重奏曲で、その曲はとても穏やかで詩的です。

H: この初期の彼の作品には、そこここにハイドンやモーツァルトの影響が見え隠れしています。

Y: 第 11 番は、弦楽四重奏曲の作品の中でも中期最後、作曲家としても彼の後期に入る直前の曲です。第 1 番や、第 16 番と同じく、調性を F で統一しています。ベートーヴェンは「この曲は小さな愛好家のサークルのために作曲されたものであり、公の場で演奏されるためのものではない」と語っています。

H: もっともコンパクトに凝縮された曲です。ここにはもう、モーツァルトの影は見当たりません。

H: 第 15 番は、実際は 13 番目に作曲された曲です。長い病に伏せた後に書かれました。第 11 番に比べると、2 倍の長さに及ぶ長い曲です。

Y: この曲を選んだのは、最も精神的で、深い高い感動を併せ持った第 3 楽章; リディア旋法による「病より癒えたる者の神への聖なる感謝の歌」につきます。非常に思慮深く、生と死、そして神を意識させる曲は、大規模で革新的な音楽形式が使われています。1 人の作曲家の異なった時期の優

れた作品を一晩で全部聴けるというのはとても珍しいコンサートだと思います。また、ベートーヴェンについて、また、その曲たちについての新しい発見をしていただければと思います。



ピーター・ゼルキン(ピアノ)と g2nd street Y(NY)にて

【Q3】ベートーヴェンの全曲演奏は上海クアルテットの結成 20 周年を機に世界各地で取り組み、日本では東京、大阪、北海道で公演を、さらに全曲レコーディングも行いました。以後も進行中ですが、これから取り組まれる予定の作曲家がいれば教えていただけますか？

Y: 次のシーズンで上海クアルテットは結成 33 周年を迎えます。“Bs”と名づけた、ベートーヴェン、ブラームス、バルトークの全曲演奏会を進行中です。2013 年から 2014 年にかけて上海でベートーヴェンの全曲演奏会を、2014 年に上海と北京でバルトークの全曲演奏会を行いました。来年の 5 月には北京でのベートーヴェンの全曲演奏会が終わります。そして、長年親交のある演奏家をゲストに迎えて、アンサンブルの曲も含めた、ブラームスの曲にも取り組む予定です。

【Q4】日本のお客さんへメッセージをお願いします。

Y: 1996 年の日本デビュー以来、もう数え切れないほど来日を重ねています。古くからの友達や、音楽ファンの皆様にお会いできることを、懐かしいふるさとに帰るようにとっても楽しみにしています。日本食もそして日本酒も大好きです！

ここ数年で、イタリア、ポーランド、フランス、オーストラリア、そして、たくさんのアジア諸国で演奏旅行をしてきました。しかし、常に、何かが足りないと思うことがありました…それは、そこに日本が入っていないこと、最後に日本で演奏してから 3 年もたっていました。光陰矢のごとし！

私たちはたくさんの経験を積んできました。世界は悲しく混沌とした状況に直面しています。そんな危機の中でも、音楽には、人々の心をひとつにし、深い痛みを癒す力があると信じています。私たちは音楽家としてそれを担う使命があると思っています。



ベンデレツキ(作曲)とワルシャワの演奏会で